



経営の散歩道

一〇四回

川中経営所長 川中清司

傑僧である。

日本海にロシア船の重油が大量に流れる。株は一挙に二千万近くも下がる。ペルー日本大使館の人質事件が起きる。

国も企業もいつ何が起るかわからない不安が続くなかで、危機に臨んだトップの姿勢が問われている。

元禄時代、赤穂浪士の処置をめぐって美事な決断を下し対応した一禅僧の話題を提供する。

◇ ◇ ◇

▼鯖江市の萬慶寺は赤穂義士と深いかわりがある。

のちに萬慶寺の開山となった承天和尚が義士討入りの当時、命にかえて義士の身柄を泉岳寺に預り守り通したのである。

奉行所も承天和尚の願いをいれて、目付を先頭に二百人を派遣し警護に当った。

大石内蔵助もそのとりなしに感動して、討入り当夜の様子を詳細に物語った。

承天和尚が自らそれを書きとどめたものが、弘化五年に「義士夜討高名咄(ばなし)」として出版されている。

▼承天和尚はのちに泉岳寺の住職などを経て、大本山永平寺の禅師となり、焼失した伽藍を再建するなどの大業をなしとげた

享保一二年(一七二七)に、鯖江に移り住み萬慶寺の初代の住職となった。

発足して間もない鯖江藩の基礎づくりにも尽力し、「永平寺より三百両を拝借」して財政を



赤穂義士と萬慶寺

その1

救った記録もある。

承天禅師の二五〇回忌は、平成五年五月一五日、萬慶寺で久我孝則老師(現永平寺副監院)のもとで厳かに営まれ、多くの市民が参詣した。

義士を守った承天禅師

▼元禄一五年二月一五日の朝、返り血を浴びた赤穂浪士の一行が、泉岳寺に引き揚げてきた。

負傷した者も少なくないが、夜を徹して戦った疲れの色は少しもみえない。どの顔も本望をとげた喜びに輝いている。

「われわれは、浅野内匠頭の家来浪人どもでござる。昨夜、亡君の仇、吉良上野介殿の邸に乱入いたし御首を申しうけたり」「亡君の墓前に参り首をそな

え焼香したいと存じ、只今参上仕った」

門番から急報をうけた役僧の一呑が直ちに寺の席に伝え、副守の石柳長老から住職に伺うが何の指示も返ってこない。

夜討ち殺傷を犯した罪人集団をどう取扱うべきか。泉岳寺の幹部は対応に苦慮し狼狽した。

はないか」

立ちあがり、「たとえ夜討ちをはたらき殺傷を犯したる者共とはいえ、み佛にすがり来たりしもの、とく受け入れられよ。おとがめあれば拙僧がお引うけ申す」と

言い放った。このひとで浪士の受入れが決った。

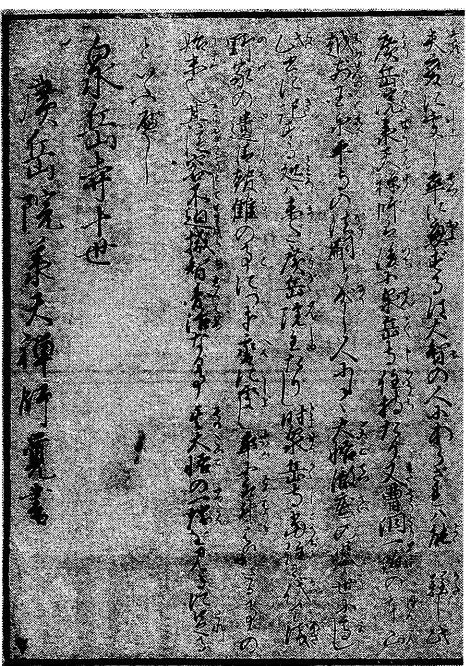
さっそく門を開き、一行を寺寮に案内する。典座(台所)を動員して粥をつくらせる。どんな炭火をおこしてあたらせる。泉岳寺はあわただしく浪士の介護に動き始めた。

▼承天和尚は泉岳寺傘下の各寺坊に使いを走らせ人を集め、吉良方の逆襲に備えて門を閉ざし警護の態勢を堅めさせた。浪士らのいる寮に行つて、

「しかし、公儀に皆さまをお委せするまでに、吉良方から討手が押しよせて皆さまに手紙を負わせるようなことがあつては、当寺の恥辱と相成ります。一命をすててもこれを防ぐべく、すでにこの寺の門は堅く閉じ警護いたしております。安心してご主君の墓にお参りください」

内蔵助は、「ご配慮のほど万ばんかたじけのうござる」

一同を率いて内匠頭の墓前にむかった。



『義士夜討高名咄』(泉岳寺蔵版)の末尾
弘化5年(1848)申年2月刊

「私は泉岳寺の住職・承天と申す者です。本懐をとげられた皆さまの只今のご心底は如何か、お尋ね申し上げたい」と

言うところ、一同が平伏する中で、大石内蔵助が

「先ほど吉田忠左門と富森助右衛門を仙石伯耆守様お屋敷に差し遣わしました。ご公儀から切腹せよとお仕置きを頂くようお願いに上ったところです」と答えた。

泰然としたその態度に感じ入った承天和尚は「ご尤も千萬なことです。皆さまのご心底を承ってから、私自身が寺社奉行に出むき報告する積りでござつた」と

一同を見わたして、「しかし、公儀に皆さまをお委せするまでに、吉良方から討手が押しよせて皆さまに手紙を負わせるようなことがあつては、当寺の恥辱と相成ります。一命をすててもこれを防ぐべく、すでにこの寺の門は堅く閉じ警護いたしております。安心してご主君の墓にお参りください」

内蔵助は、「ご配慮のほど万ばんかたじけのうござる」

一同を率いて内匠頭の墓前にむかった。